
#Bio Cord

青葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

#Bio Cord

【Nコード】

N8192Y

【作者名】

青葉

【あらすじ】

なんの変哲もない田舎で、馬鹿力の神社の息子と毒舌少女が織り成す現代ファンタジー。

#逢瀬

夏は嫌いだ。

虫が多い。

人は何故大人になるにつれて昆虫の存在をおぞましく思うのだろうか。

それは彼らに飛翔能力があるからか、はたまた異形な姿形に嫌悪感を見いだしてしまうせいなのか。

確か、そんな虫が題材の映画があったような気がする。

そう。

彼らには無限の可能性がある。

何故なら彼らは、進化の最先端から二番目に近い存在なのだから。

雨原秋也は考えていた。

しとしと糸蜘蛛のような雨粒と、裂けた雨どいから時折したたる無粋な音を交互に見聞きしながら。

「やはり、梅雨前に直しておくべきでしたか。」

腕組をしながらふうむと唸る。

雨どいを見るために身を乗り出しすぎた黒髪に雨粒が滴たり、ゆるりと落ちていく。

とても齡、17歳とは思えぬ落ち着きを払う彼は、無論、ただの高校生である。

別に仙人様だとかそんな類いではないのだ。

山奥暮らしには変わりはないのだけれど。

「さて、と。」

手早く身支度を済ませ、そとに出る。

いくら衣替え前といえど、ワイシャツに学蘭の姿はいささか冷える。ぶるりと体を震わせると、不意に枝についたカタツムリと目があつた。

雨は一向に止む気配はない。

依然として、しめやかに雨粒をこぼすばかりだ。

「ああ、今日も傘が必要ですね。」

一人ぼやき、散在している傘立てから、透明のビニル傘を取り出した。

昔は唐笠を愛用していたのだが、いかんせん、目立って不良どもに目をつけられたのでやめた。

ああいった輩は面倒くさいのだ。

別に秋也が社会不適合者という訳じゃない。
勉学も運動も十人並み。

その身に余る馬鹿力を除けば、の話だが。

ガラリと玄関を開けて遙か下界を見下ろす。

梅雨は好きだ。

何故ならこの観光地の乏しい街並みが、唯一鮮やかに見える季節だからだ。

皆、思い思い鮮やかに色づいた紫陽花。

紫もあれば、真っ青なものもある。

濃密つなまでに咲き誇るこの紫陽花の参道の名は…。

――…大平山紫陽花坂。

「…っと、見とれている場合ではありませんね。バスに遅れてしまいます。」

濡れた石段で足を滑らせぬよう注意しながら早足で下る。

なにせ過疎地帯のド田舎だ。

バスが40分おきしかない。

ましてやこんな階段まみれの道合じゃあ自転車もろくに使えないの

だ。

そう考えれば必然的に足取りも急ぎ足になってしまう。

「神社の跡取り候補とはいえ、こればかりは堪えますね。下界に下宿用のアパートでも借りさせて貰えれば助かるのに。」

去りげに毒を吐きながら最後の石段を降りきると、もう眼前に高校行きのバスが停まっているのがみえた。

丁度往復地点の車内確認の真っ最中だったようだ。

これは少し走れば間に合いそうだ。

「ちょっと：待ってくださいっ。」

不意に、背後に自分以外の声が聞こえて、はて。と、首をかしげた。おかしい。

紫陽花坂は一本道だし、下るときはだれともすれ違わなかったのだ。あの坂は階段の段数も多く、一度下るのに男の足で10分は掛かる。ましてや、濡れた石階段の上などとても走っては下れまい。

考えながらバスに乗り込む。

傘を正して、二人掛けの座席へ腰掛ける。

：と。間もなく、誰に当てたか分からない声が降ってきた。

「もう、待ってって言ったのに……!!!!」

顔を見上げると、眼前に見ず知らずの少女と目が合った。

日本人らしい黒髪の、中学生くらいの女の子だった。

白磁のような肌と相まってか、不思議と大人びて見えたが、未成年には変わりないだろう。

少女が近づくにつれて、濡れて重くなった衣服から滴が滴り落ちる。墨を垂らしたような長い黒髪も同様だ。

泣きそうな、切羽詰まったようななんとも言えない面持ちで、彼女は立ち止まった。

よりにもよって、ぼくの目の前で。

「あのっ、ちょっと来て。」

「……僕これから学校なんですけど……」

苦笑い気味に答えると、少女は儂げな井出だちに削ぐわぬ声で、急に怒鳴った。

「うら若き乙女が助けてっていったんのよ、なんのために傘もささずに走ってきたと思ってるの?!」

人気の少ない車内がしん。と、静まり返る。

厄介なのに捕まってしまったな…。
頭を押さえてため息をつく。

今日は不本意だが学校は休みを頂こう。

「…分かりました。話くらいなら聞きますから、外に出ましようか。」

その一言で少女は満足したようだ。

僕は車掌に詫びを入れて、バスから降りた。

外の湿気と雨粒で霏がかった景色を見つめながら。

#繋がり

誰もいないバス停の下、朝一番に見知らぬ少女に怒鳴られるとは、一体どういった不仕合わせだろう。

はぁ、とため息をつきたくなるのを抑えて、秋也は少女に向き直った。

「で、なんです。藪から棒に。いくら初対面の人だからって、急に怒鳴っちゃだめですよ。」

「わかってるわよ、それくらい。」

優しくたしなめたつもりが、どうやらお気に召さなかったらしい。少女はプイ。と、そっぽを向いてしまった。

だが、しばらくの間が開いてから口を付いた台詞は、反撃の言葉では無かった。

「それぐらいしなきゃ、誰も振り向いてくれないと思っただんですもの。私は子供だし、バスに乗る…お金も…なかったから。」

最後は泣きそうな声だった。

「…誰かに、気付いてほしかったの…。私はここだよって。」

嗚咽をこらえるように震える肩が痛々しい。

いくら理不尽な出会い方をしてしまったとはいえ、心の余裕がない彼女には辛い接し方だったのだろう。

「兎に角、そのままでは風邪を引きます。」

「え……。。」

「少し離れですが、話ならうちで聞きましょう。どのみちそのままでは風邪を引きます。」

濡れた服を指差すと、彼女は壊れそうなくらい驚いた顔で見つめてきた。

それから、涙と笑顔の混じったくしゃくしゃの笑顔でお礼を言った。

「……………」

「…雨は、止まない。」

寧ろ、雨足を強めるばかり。

それはまるで、彼女の憂いを映すが如く。

僕は歩いている。

バス停を離れ、家へ向かう途中だ。

時折傘から零れる雨露。

階段を上がる靴音。

濃密な紫陽花の並木を、彼女のペースに合わせてゆったりと歩く。
山道に不馴れであろう彼女が転ばぬように。

「ところで君は何者なんです？」

そう、傘を傾けながら秋也は問う。

「私？辻木素子だよ。北中里中学校二年生。」

辻木と名乗る少女は、にこっと笑ってピースサインをして見せた。

「北中里？隣町じゃないですか。なんでまたこんなところに？」

「さあ、わかんない。私、多分、誘拐されたから。」

さりと物騒なことってくれる。
て、いうか多分ってなんだ。

多分って。

はあ。と、ため息をつく。

傘を素子の方に傾けてやると、素子はカラカラと笑った。

「大丈夫だよ、オニーサン。私もう濡れ鼠みたいになってるもん。」

「そういう訳にも…。ああ。僕は、雨原秋也です。この神社を継ぐ嫡男らしいです。よろしくお願いしますね。」

「嫡男？らしい？なんだかよく分からないけどすごいよね。よろしく、秋也。」

「ところで誘拐とは…。」

問いかけようとしたところで素子は歓声を上げて質問を遮った。

「わあーっ、すごいっ。秋也っ、鶏がいる！！秋也の家はあっち？」

濡れるのも構わずはしゃぎながら社務所の方へ駆けていく素子。
話を区切られてしまった秋也は、タイミングを逸して素子を見送る
ことになった。

そうだ、目の前にいる女の子は遊びたい盛りの中学生なのだ。状況が状況でも、それに変わらないのかもしれない。もしくは、単純に理由を知られたくなかったか。

「素子さん、そちらは社務所です。奥に行ったら本殿ですよ。僕の家はこちらです。」

苦笑いを浮かべながら手招きをすると、素子は恥ずかしそうにしながらこちらに駆けてきた。

「ごめんなさいっ。あんなに沢山の鶏が放し飼いになっているのは、初めて見たの。」

「まあ、うちの社は鶏が象徴ですからね。」

「そうなんだっ。秋也はいろいろ知っていてすごいねっ。」

一体何が、どうすごいんだか……。クスリと笑み、僕は母屋へ向かった。最後は泣きそうな声だった。

「…誰かに、気付いてほしかったの…。私はここだよって。」

嗚咽をこらえるように震える肩が痛々しい。

いくら理不尽な出会い方をしてしまったとはいえ、心の余裕がない彼女には辛い接し方だったのだろう。

「兎に角、そのままでは風邪を引きます。」

「え……。」

「少し離れですが、話ならうちで聞きましょう。どのみちそのままでは風邪を引きます。」

濡れた服を指差すと、彼女は壊れそうなくらい驚いた顔で見つめてきた。

それから、涙と笑顔の混じったくしゃくしゃの笑顔でお礼を言った。

「……………」

「……雨は、止まない。」

寧ろ、雨足を強めるばかり。

それはまるで、彼女の憂いを映すが如く。

僕は歩いている。

バス停を離れ、家へ向かう途中だ。

時折傘から零れる雨露。

階段を上がる靴音。

濃密な紫陽花の並木を、彼女のペースに合わせてゆったりと歩く。
山道に不馴れであろう彼女が転ばぬように。

「ところで君は何者なんです？」

そう、傘を傾けながら秋也は問う。

「私？辻木素子だよ。北中里中学校二年生。」

辻木と名乗る少女は、にこっと笑ってピースサインをして見せた。

「北中里？隣町じゃないですか。なんでまたこんなところに？」

「さあ、わかんない。私、多分、誘拐されたから。」

さらりと物騒なこといつてくれる。
て、いうか多分ってなんだ。
多分って。

はあ。と、ため息をつく。

傘を素子の方に傾けてやると、素子はカラカラと笑った。

「大丈夫だよ、オニーサン。私もう濡れ鼠みたいになってるもん。」

「そういう訳にも…。ああ。僕は、雨原秋也です。この神社を継ぐ嫡男らしいです。よろしくお願いしますね。」

「嫡男？らしい？なんだかよく分からないけどすごいね。よろしく、秋也。」

「ところで誘拐とは…。」

問いかけようとしたところで素子は歓声を上げて質問を遮った。

「わあーっ、すごいっ。秋也っ、鶏がいる！！秋也の家はあっち？」

濡れるのも構わずはしゃぎながら社務所の方へ駆けていく素子。話を区切られてしまった秋也は、タイミングを逸して素子を見送ることになった。

そうだ、目の前にいる女の子は遊びたい盛りの中学生なのだ。

状況が状況でも、それに変わりないのかもしれない。
もしくは、単純に理由を知られたくなかったか。

「素子さん、そちらは社務所です。奥に行ったら本殿ですよ。僕の家はこちらです。」

苦笑いを浮かべながら手招きをすると、素子は恥ずかしそうにしながらこちらに駆けてきた。

「ごめんなさいっ。あんなに沢山の鶏が放し飼いになっているのは、初めて見たの。」

「まあ、うちの社は鶏が象徴ですからね。」

「そうなんだっ。秋也はいろいろ知っていてすごいねっ。」

一体何が、どうすごいんだか…。
クスリと笑み、僕は母屋へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192y/>

#Bio Cord

2011年11月24日11時48分発行